P1-001

医療的ケアが必要な子どもの母親と健康な子どもの母親の育児ストレスの特徴

宮崎 つた子、井倉 一政、木村 めぐみ
三重県立看護大学

【目的】
地域には、医療的ケアを継続しながら在宅で生活する子どもたちが増加しているが、子どもの医療的ケアのほとんどは家族が行い、その内の9割以上は母親が行っている（山本ら、2011）。本研究では、医療的ケアが必要な子どもを育てる母親と健康な子どもを育てる母親の育児ストレスの違いや特徴を明らかにする。
【方法】
対象は、医療的ケアが必要な子どもの母親と健康な子どもの母親であり、研究目的や方法、研究協力の自由、個人情報の保護などを文書と口頭で説明し、同意を得た。調査期間は、2015年2月から2016年10月。調査内容は、対象のデモグラフィック要因、養育・環境要因、日本語版育児ストレスインデックスショートフォーム（以下PSI－SF）で構成した。なお、本研究は、協力病院の倫理審査委員会および関係する行政機関の承認を得た上で実施した。解析には統計ソフトSPSSを使用し、医療的ケアが必要な子どもの母親と健康な子どもの母親の育児ストレス得点の比較を行った。
【結果・考察】
対象は、医療的ケアが必要な子どもの母親18名と健康な子どもの母親42名であった。平均年齢は、医療的ケアが必要な子どもの母親37.72±5.89歳、健康な子どもの母親32.33±5.02歳であり、有意な差が認められた。また、子どもの人数でも有意な差が認められた。PSI－SFの得点は、子どもの側面、親の側面、総点で医療的ケアの必要な子どもの母親の得点が高かった。下位尺度では、子どもの側面で、「私の子どもは他の子どもよりも手がかかるようだ」などの5項目、親の側面で、「やりたいことがほとんど出来ないと感じている」、「夫との問題が思ったより多く生じている」などの3項目に有意な差が認められた。これらの結果から、健康な子どもの母親に比べて、医療的ケアが必要な子どもの母親は、あらゆる側面でストレスを感じている事が明らかになった。全体の得点だけでなく、下位尺度にも着目することで、母親がどの側面にストレスを感じているのか、一人一人のストレス要因や実情の理解を深めることができると考えられる。子どもの状態や日常生活の過ごし方、家族・社会的背景などとの関連を含めた状況を把握して支援に繋げることが必要と思われる。
【結論】
在宅で医療的ケアが必要な子どもを育てている母親は、健康な子どもを育てている母親に比べて、子どもの特徴によるストレス、親自身に関するストレスが共に高かった。

P1-002

乳幼児の食事習慣の獲得と指導－保育者への子どもの基本的生活習慣調査より－

鷲見 裕子[1]、宮崎 つた子[2]
[1]高田短期大学 子ども学科、
[2]三重県立看護大学 看護学部

【目的】
乳幼児期は基本的生活習慣の獲得が大切な発達課題であり、幼稚園・保育所の指針等においてもその重要性が示されている。近年は子どもの基本的生活習慣の乱れや育児不安など多くの課題がみられる。本研究は子育て支援の取り組みの基礎資料とできる基本的生活習慣の現状把握を目的とした。本報告では保育者への調査を通して乳幼児の食事習慣の獲得過程の変化と保育の場での指導展開の状況について検討した。
【方法】
A県内の協力の得られた保育園の保育者を対象に、平成28年3月に無記名自記式質問紙調査を行った。調査項目は日頃感じている基本的生活習慣の獲得時期と指導留意点について選択肢と自由記述で構成した。獲得時期の項目には高橋*による発達基準を示した。倫理的配慮は研究の趣旨等を紙面に示し、返信をもって同意を得た。なお、本研究は所属大学研究倫理委員会の承認を得て実施した。
【結果】
回答を得た113名（回収率66.5％）より食事習慣の記述不備を除いた83名を分析対象とした。食事習慣の獲得時期に変化を感じると回答した保育者が6割あった。離乳と食事行動の獲得時期では6割前後の保育者は変わらないと答えていたが、変化を感じている回答では、「離乳の開始」、「箸を使う」、「一人で最後まで食事ができる」等、離乳や自食、食器・食具使用については遅くなったと感じる保育者が多かった。好き嫌いでは時期は変わらないとするものが8割を占めたが、好き嫌いのある子どもが増えたと感じる保育者は6割であった。食事習慣の獲得の遅れの要因については、発達や家庭環境での個人差や大人に合わせた不規則な生活リズム、親の食に対する意識等が自由記述にみられた。食事習慣の指導について8割の保育者が留意していることがあると回答した。具体的な指導内容は、記述のカテゴリー分類より「マナー」、「好き嫌い」、「摂食機能」と「食器使用」の順に多かった。また、具体的なアドバイスや食の大切さを伝える等「保護者支援」の記述もみられた。
【考察】
保育者調査より食事習慣の獲得について半数以上が変化を感じており、子どもの生活環境の変化や親の養育意識などから獲得が遅くなる傾向と、保育現場では獲得に向け、個別対応での指導が工夫されている様子が伺えた。子どもが適正な食事習慣を獲得するためには、保育現場での日々の指導と、家庭との連携を深める取り組みが重要といえる。
＊高橋弥生他：「健康」一藝社（2011）

Presented by Medical*Online